

Glocal Tenri



12

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.22 No.12 December 2021

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

CONTENTS

- ・巻頭言
ブラジルの天理教 ①
／永尾 教昭 1
- ・日本語教育と海外伝道 (最終回)
日本語教育と異文化伝道 ⑥
／大内 泰夫 2
- ・コンゴ社会から見るアフリカ・ヨーロッパ関係
試論 (41)
パスカル・リスバ②
／森 洋明 3
- ・伝道と翻訳—受容と変容の“はざま”で— (32)
仏典翻訳の歴史とその変遷 ⑩
／成田 道広 4
- ・音のちから—中国古代の人と音楽 (5)
中国古代人は音の共鳴現象を知っていた!
／中 純子 5
- ・ヴァチカン便り (53)
安楽死容認の難しさ
／山口 英雄 6
- ・ニューヨーク通信 (11)
ワクチンの義務化と文化協会
／福井 陽一 7
- ・思案・試案・私案
「碑」の字表記問題再考 (16)
／八木 三郎 8
- ・2021 年度公開教学講座要旨:『逸話篇』に学
ぶ (7)
第2講:127「東京々々、長崎」
／金子 昭 9
- ・図書紹介 (128)
島田勝巳著
『宗教から見た世界』(天理教道友社、2021 年)
／堀内 みどり 10
- ・おやさと研究所ニュース 11
第 342 回研究報告会／第 343 回研究報告会
／宗教倫理学会第 22 回学術大会を開催／
2021 年度公開教学講座のご案内

巻頭言

ブラジルの天理教 ①

おやさと研究所長 永尾教昭 Noriaki Nagao

これまで見てきたように、ちばへの信仰は天理教教理の中で最も重要なものと言っても過言ではないだろう。そして、そこから当然、ちばへの帰参は信仰生活の根幹をなすことになる。それゆえ、日本以外の国々で天理教の信仰を続けていく上で、その国の中で完結することはあり得ない。必然的に常にちば、そしてちばが存在する日本という国を意識せざるを得ないことになる。

日本国以外での天理教の布教が、韓国、台湾などを除いて、今なお、いわば「異文化伝道の中の海外布教」つまり、異文化圏にいかんが教理を浸透させ信仰者を増やすかという問題以前の段階にあると筆者が考える理由が、ここにある。どうしても、日本というものを引きずらずに、現地人信者が主導して現地人信者が自律的に信仰するという形には今なお、なり難いのである。さらに、例えば、日本以外の地への布教に関して、韓国人天理教信者がアメリカに布教に行くとか、フランス人信者がアフリカ・コンゴに布教に行くといった前提で語られることも、ほぼない。あるいは、ある国で天理教講演会を催すに際し、多くは日本から講師が派遣される。なかなか他の国から布教師や教会長を招いて開催するという発想になりにくい。常に日本を中心に語られてしまうのは、布教師のバックアップ体制が脆弱になってしまうということもあるが、同時に教団内の人々の意識の中に、ちばすなわち「日本から」という固定概念が壊れないからでもあるだろう。筆者も、その内の一人かもしれない。

筆者は決して、ちば信仰を蔑ろにしろというのではなく、逆にちば信仰が重要であるゆえになお一層、各国各地での布教手段の不断の検討が必要になると思う。それは、以前にも述べたように、天理教を信仰する人は必ずしも日本への憧憬を持っているわけではなく、純粋に教理や教

祖の立教後の人生(「ひながた」と呼ばれる)に感銘を受けたり、不思議な守護を体験したからであって、本来、「日本」は関係がないからである。

ブラジルの例を考えてみたい。天理教内では、日本以外ではブラジルは韓国、台湾に次いで信者数も多く、また活動も活発な国である。

ブラジルには国策として、1908(明治41)年から順次多くの日本人が農業移民として渡っていった。1914(大正3)年から1928(昭和3)年までに、約20名の天理教信者も渡伯したようだが、必ずしも彼の地で布教をするという志を抱いていたわけではないようである。

1925年、中山正善2代真柱によって天理外国語学校(現天理大学)が設立される。同校は、海外布教師の養成を目的としていた。天理教では現在でも、教祖が身を隠して後の年数を十年単位(「満」ではなく「数え」で計算する)で区切り、それを「年祭」と称して祭典を勤めている。その年祭を一つの節目として布教活動の高揚が呼びかけられるが、1926年には教会本部で教祖40年祭が勤められ、前年の天理外国語学校の設立と相まって、全教的に海外布教の意気が高まっていた。

このような雰囲気の中で、和歌山県にある南海大教会では、大教会の総力を結集して南米伝道を開始することとなり、1929年和歌山県からの集団移住に混じって、4家族がブラジル布教に従事すべく出帆した。その後、他の教会からも多くの布教師が順次ブラジルの地に送られていく。

その4家族の中に、のちに初代ブラジル伝道庁長となる大竹忠次郎がいた。大竹は、渡伯後、白熱的な布教活動に励み、やがてブラジルの道はこの大竹を中心として伸びてゆくことになる。

【参考文献】

『天理教ブラジル伝道史』天理教ブラジル伝道庁、1958年。